

始

人間と怪異の境界線はどこにあるのだろう。
社会が敷いた倫理を逸脱した瞬間、
人はそれを「バケモノ」と呼ぶのかもしれない。

アスファルトを照りつける太陽が重い雲に隠れ、空気がひやりと沈んだ。雷が鳴り、途端に叩きつけるような雨が降りだす。服は瞬く間に水を吸って肌へ貼りついた。焦りのまま走り、ようやく逃げ込んだ場所は寂れた団地の一棟だった。

廃墟、という言葉がすぐに浮かぶ。

コンクリートの壁は黒ずんで、床には瓦礫や廃材が散乱している。解体中なのか建設途中で放棄されたのか。人が立ち入らなくなったことで加速度的に朽ちていく建物独特の、不気味で重い空気が立ちこめていた。

スマホを開くと、圏外だった。地図も天気予報も読み込めない。再起動しても状況は変わらず、『現在地を取得できません』とエラーが繰り返し表示される。

（もしかしたら、ここだけ電波が悪いのかもしれない。少し移動すれば電波が拾えるだろう）

……そんな楽観は、すぐに打ち碎かれた。

どこまで歩いても電波が拾えない。それどころか入口までも見失ってしまった。次第に、同じ場所を巡り続けているのではないか、という疑念が胸をよぎる。名状しがたい焦燥に急ぎ立てられ、歩調は無意識のうちに速まっていた。肌にまとわりつく湿り気が不快だ。それが汗なのか、雨なのかも判然としないまま、雫が顎先から落ちていく。

その時、視界の先にドアが見えた。隙間から微かに光が漏れている。

（助かった……。外に出られる）

扉を押し開けた瞬間、束の間の安堵は凍りついた。

誰か、いる。

傘も、コートも、髪までもが鮮やかな赤。男の存在は、雨が降る灰色の世界で異様なほど浮いていた。赤色に包まれた長身の足元に広がる影に目が吸い寄せられる。いやあれは影じゃない。

……血だ。

転がる亡骸^{なきがら}は激しい暴力にあてられ不格好にひしゃげて、割れた頭蓋は潰れたザクロのようにその内側を晒^{さら}している。夥^{おびただ}しい量の血が流れだし、その上に彼は立っていた。

理解が追いつかない。

現実とは思いたくない。

心臓が激しく脈打ち、呼吸が荒くなる。込みあげる吐き気に口を押さえ、たたらを踏んだ。男がゆつくりとこちらに顔を向ける。その背後から、もうひとり——誰かが現れた。

白いレインコート。

フードを深く被^{かぶ}り、顔は影の内に隠されている。

小柄で華奢^{きゃしゃ}な手に、明らかに不釣り合いな武器が握られていた。

ぬらりと鈍い光を弾^{はじ}く鉄の先端から、血が滴り落ちる。

脳が本能的に叫ぶ。

（逃げる。今すぐ逃げる——！）

なのに脚は凍りついて動かない。

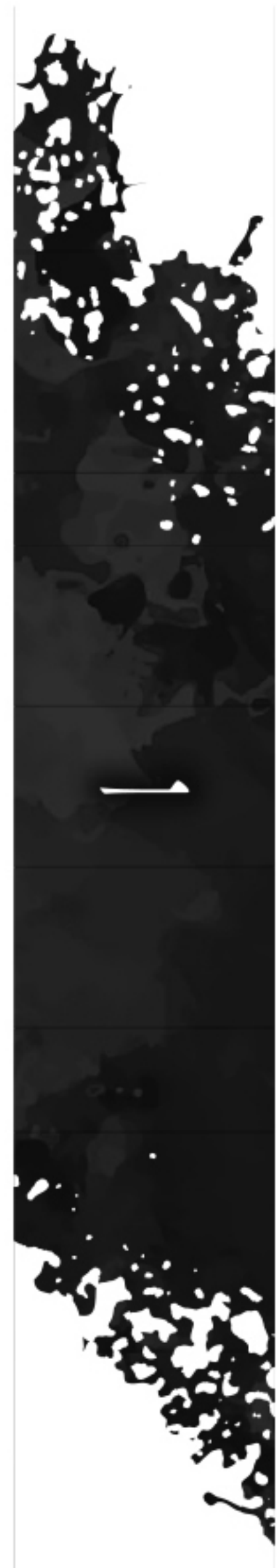
それがこちらへ近づいてくる。歩幅の小ささが、恐ろしかった。足取りの軽やかさが、悍^{おぞ}ましかった。とっておきの遊びを心から楽しんでる子どものように見えたから。

雷鳴^{らいめい}が轟く。

稲妻に照らされた口元は、笑っていた。

衝撃とともに視界が染まっていく。赤く、赤く、赤く。

そして二度と、目覚めることはなかった。



耳を刺す音に、乱暴に引きずり起こされる。枕に顔を伏せたまま腕を伸ばし、手探りで音を止めた。再び眠りへ戻る余地はなく、掌中の端末から軽快な声が発せられた。

「もしもし、あだみ？ 起きてた？」

はりつく瞼をこじ開けて画面に表示された「お母さん」の文字を睨む。
起きてた、ではなく起こされたが正しい。

「……今何時だと……」

「お昼ね」

「こっちは五時なのだけれど」

顔に掛かる髪を掻き上げながら身を起こす。カーテンの隙間から見える外はまだ薄青く、夜の気配を残している。そんな早朝の静けさとは対照的に、電話の声は真つ昼間の明るさだった。

「モーニングコールには早すぎたかしら。それより学校はどう？ 楽しい？」

「問題なく高校生活を送っているのでご心配なく。眠いから用件だけ言ってほしい」

「つれないわねえ……この間送ってくれた本が届いたの。ああいう古い専門書はこっちじゃ手に入らないから、本当に助かったわ。ありがとう」

「あー……あれのこと」

町外れの古本屋まで炎天下を歩かされた記憶がよみがえり、思わず顔をしかめた。どうもこの人は私を便利な代行業者のように考えている節がある。内心の呆れをよそに、電話の向こう側が急に騒がしくなった。

「あら、ごめんなさい。もう切らないと。お金はいつも通り入れておくから」

「まさか、本のお礼が用件？」

「そうよ。じゃあ身体に気をつけて。あ、パパにもたまには連絡してあげてね」
言うだけ言って一方的に通話が切れる。

呆然としたまま画面を見つめ、しばし身動きが取れなかった。お礼など、短いメッセージひとつで済む話だろうに。その程度の用件で早朝に起こされるのは、どうにも割に合わない。スマートフォンを枕元へ放り出し、再びベッドに身を横たえた。

なかなか眠気は戻ってこない。

迷惑な電話のせいか、それとも——夢のせいか。

電話で起こされる直前、夢を見ていた。昔から繰り返し見る悪夢だ。

夢の内容はそのたびに異なるけれど、結末だけはいつも同じだった。

高い場所から身ひとつで落ちていく「私」。

あの浮遊感を思い出すだけで胃のあたりがむかむかして背筋が寒くなる。体験したことなどないのに、やけに生々しくて現実感があつた。そんな悪夢のせいか、いくら待っても眠気は戻らず、結局そのまま朝を迎えることになった。

あくびをこらえながら昇降口で靴を履き替え、教室に向かう。

自分の席に鞆^{かばん}を置いた途端、背中を叩^{たた}かれ「おはよう」と声を掛けられた。

「うわ、顔色悪いね。また夜更かしでもしたの？」

「夜更かしというか……」

早朝の電話や、夢のことが頭をよぎる。両親が海外赴任中だという事情は話題にしづらく、夢の内容を口にする気にもなれなかった。夢占いを信じるならば、高所から落ちる夢はストレスや抑圧の表れだとあるので、変に心配されるのも面倒で当たり障りのない返事でその場をやり過ごす。

「キリがいいところまで本を読んでいたら、少し寝るのが遅くなっただけ。そんなに酷^{ひど}い？」

「うん、真っ白」

「今更じゃない？」

「そう言われるとそうかも。ま、あんま無理しないで。明日から夏休みだしさ……そうだ。今日は終業式。」

明日から夏休みということで、教室の空気もどこことなく浮き足立っている。

「そういえば、裏門の先の寂れたシャッター街……出たらしいよ」

「……何が？」

「不審者！ 細い路地の隙間から通りを覗^{のぞ}いてる男がいたんだって。しかも絶対人間が入れないような狭い隙間から、目だけが見えたって！」

「ああ、そう……」

それなら犬か猫ではないのか、と心の中で思う。

もったいぶったわりに内容は曖昧で、肩透かしを食らった気分だった。ところが、何人かが会話に加わり、興味本位で騒ぎ始める。なぜか私の机の周りで話題が広がっていき、輪から抜けることもできなくなっていた。

「最近ほかに流行^{はや}ってるじゃん。ほらあれ、呪われた団地みたいな」

「あーね、ヤバイ怪異も出るって噂^{うわさ}だね。まとめ動画で見たわ」

「まとめるほど怪異がいるのかよ」

誰かのひと言に、周囲から笑いが起こる。ネット上で広まるオカルト話など、誰も本気で信じてはいない。ひとしきり盛り上がったあと、話題はいつの間にか夏休みの予定へと移っていった。やがて予鈴とともに、皆がそれぞれの席へと散っていく。

「さっきの話、ただの噂だと思うけど一応気をつけなよ。帰りあのシャッター街通るでしょ？」

「……そうだね。わかった」

ふと隣の空席に目を向ける。

幽霊や怪異、そんなものが本当に存在するのかはさておき、この世界には、解決されない事件や真相不明のままの事故が山ほどある。例えば、随分前から行方不明^{ゆくえふめい}のクラスメイトとか。

「化^{あだしの}之」

誰かが気配を潜めて近づいてきた。私の周りから誰もいなくなるのを見計らったタイミングで。目を上げると、ひとりの男子生徒がいた。

彼が口を開く。

「――、――？」

「え？」

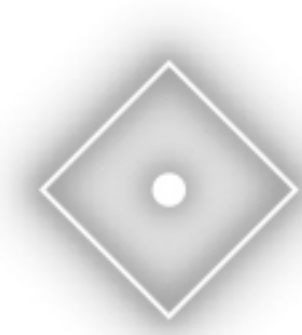
聞き取れない。

水中に突き落とされたように音がこもっていて、彼が何と言ったのかわからなかった。

その直後。

頭に激しい痛みが走る。教室の机や椅子、黒板、人の顔さえも眩暈めまいによつて歪みゆが、遠くに鳴く蟬せみの声が甲高い耳鳴りに上塗りされていく。

目の奥に金属を捻じ込まれたような穿痛せんつうに、思わず両手でまぶたを押さえた。



次に目を開けた時、世界は音も色も光も、何もかも失っていた。

見慣れた教室ではなく目の前に広がるのは、無機質なコンクリートの壁と床、そして天井。すべてがくすんだ灰色で覆われており、一見すると廃病院の廊下のような空間だった。だが窓はなく、重苦しく湿った空気が足元から迫り上がり、全身に絡みついてくる。長く伸びた廊下の先は闇に飲まれ、終わりが見えない。

「……ここどこ？」

思わず声に出して問いかけるも、答えは当然どこからも返らない。

わからない。

酷い頭痛があつたような気もするが……思い出せない。

さっきまで確かにあつたはずの記憶が、頭からこぼれ落ちている。

廊下はひどく静まり返っていて、どんなに耳を澄ましても物音ひとつ聞こえなかった。音に意識を集中させると、自分の内側で逸る心臓の鼓動だけがドクドクとうるさく感じられた。

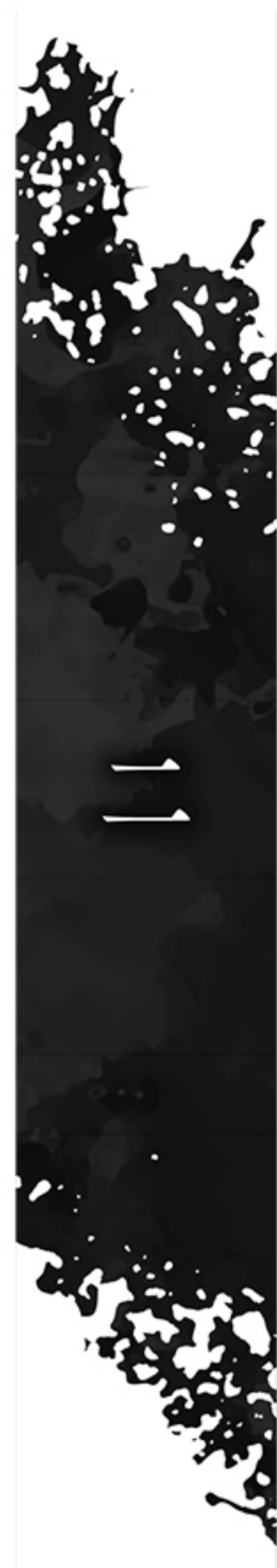
鉛を飲んだように重い身体を叱咤しったして、立ち上がる。支えを求めて壁に触れた瞬間、ぬるりとした感触があり、指先が滑った。夥しい血痕おびただ。一見すると単なる染斑そめむらにも見えるそれは壁一面に広がり、既に模様の一部と化していた。なぜ壁が、これほどまでに血で汚されているのか。

(なんなの、ここ……)

その時、天井のライトが赤く明滅した。

ずり……ずり……。

砂利を詰めた麻袋を引くような重たい音が聞こえてくる。数度の瞬きののち、暗闇だった廊下の先にそれは現れた。



廊下の先に現れたひとつの黒い影が、こちらに向かって這うように近づいてきた。

ずり……ずり……。

影が近づくにつれ、硬い床を擦る音がやけに大きく聞こえて息を呑む。生き物らしき黒い影は、あたりの暗闇の中に溶け込んでおり、その姿を視界に捉えることはできない。

ずり……ずり……。

得体の知れぬ存在が数メートル先まで迫っているものの、あまりにも非現実的な状況に、足がその場に縫い付けられてしまう。突然、影が何か音を発する。

「*uuh?? pii??*」

——言語？

聞き慣れない響きだった。区切りが曖昧で、それが何を意味するのかまるでわからない。私が黙っていると、さらに踏み込んでくる。天井に設えられた灯りに照らされ、その姿が鮮明になった。



男だ。

私の視線の先には長髪の男がいた。闇から這い出てきたかのように、両膝と両手を地についた格好をしている。背に沿って流れる黒髪は極端に長く、腰を通り越して床に垂れ広がっていた。肌は血の気を一切感じさせないほどに青白く、両目は髪に隠されてよく見えない。闇と同化しそうな黒い服から覗く両腕は筋張って逞しく、辛うじて性別が推測できる異質な風体だった。

そして何より異様なのは、生きているものに備わるはずの気配がない。外形は人に酷似しているのに、その生気のなさは、とても同じ“人間”とは思えなかった。

彼は床に両手をついたままこちらを見ている。

「いっや？」

困惑に顔を曇らせていると、彼はまるで「どうしたのだろうか？」と言わんばかりに首を傾げ、ぐつと腕に力を込めた。そして一気にこちらへ距離を詰めてきた。

「ひっ……！」

喉奥から、引き攣れた声が漏れる。次の瞬間には反射的に踵を返し、その場から逃げ出していた。（今のは何……？）

理解が追いつかないまま廊下を進み、手当たり次第に扉を開けていく。だが、現れるのは似通った部屋ばかりだ。廃墟と化した地下迷宮を彷徨っている錯覚に陥る。

ただ殺風景なだけなら、ここまで不気味には感じなかっただろう。

血で汚れたコンクリートの壁。

乱雑に散らばるゴミ。

切れかけ、断続的に明滅する照明。

昏く淀んだ空間にひしめく寒々しい静寂。

そして、先ほど目にした異形。

この場所には窓が一切なく、外界の気配は遮断されている。今が昼なのか夜なのかすら、判別できなかった。それらが折り重なって生じる不快な感覚が、胃の奥に重く沈殿していく。

ここはどこ？

私はどうしてこんなところにいるのだろうか？

教室で誰かに声を掛けられた、その直後から記憶が欠落している。その先を、どうしても思い出せない。思い返そうとするほど、霧が濃くなるように思考は空転してしまう。

（とにかく出口を探さないと……）

おぼろげな記憶を追うより、一刻も早く元いた場所へ戻ったほうが良い。

そう判断して足を速める。ここに留まってはいけない、そんな危機感が先に立つ。根拠はないが、それでも言い知れぬ予感に急ぎ立てられ、次のドアを開けた。

ギィ……。

錆びた蝶番が軋む音を立てる。

コンクリート壁に四方を囲まれた部屋だった。広さは教室くらいありそうだが、ここにも窓はなく照明は天井から吊るされた裸電球がひとつ。薄闇の向こう、奥にあるドアの前に何か――布に覆われた塊が見える。私の身長よりも遥かに大きいその塊は、目を凝らしているうちに僅かに動いた。「……！」

人だ。少なくとも人型の何か。
大きさからして……こちらも男性だろうか。

元の色が判別できないほど汚れ、裾がほつれた布をローブのように纏まとっている。くるぶし近くまで布が垂れ下がっているせいで体のラインが見えず、さらに頭部も目深かぶに被ったフードで一切見えない。そして何より目を引いたのは、彼が手にしている柄の長い斧おのだった。明らかに何かを害するための武器だ。

彼が、頭だけをこちらに向けて私を見ている。目は暗がりくらがりに隠れているのに、視線を克明に感じた。部屋に半歩ほど入った私を見つめたまま微動だにしない。こちらに襲い掛かってくる気配はないが、万が一のことを考え引き返そうとした瞬間、不意に彼が口を開いた。

「**へへへ へへへ?**」

聞き取れないがやはり言語のようだ。

「えっ……何語……?」

「**へへへ へへへ へへへ へへへ?**」

私の呟つぶやきを拾って彼が言う。語尾が少し上がっているから、おそらく私に何か質問をしているのだろう。答えられずにいると、彼が腕を持ち上げる。ローブの袖から、影を凝縮させたような真っ黒い手が出てきた。そのまま彼は無骨な指先を自分自身に向ける。

「**へへへ**」

そして次に私に手のひらを向け、指し示す。

「**へへへ**」

なんとなくではあるが……一連の動きが示すものはおそらく『私』と『あなた』。

私が、彼らを使う言語を理解できないことを察して、教えてくれようとしているのかもしれない。彼はもう一度、指を往復させて『**へへへ**』と『**へへへ**』と発声してみせる。さらにこちらを指差したまま、今度はもうひとつ単語を加えた。

「**へへへ へへへ**」

「私のことを聞いている?」

教えられたばかりの『**へへへ**』は聞き取れたけれど、続く音はなんだろうか。困った。だが、こういう時はとりあえず笑っておくに限る。笑顔で濁しておけば大概のことは解決する。そんな処世術が彼に有効かはわからないが、私がへらりと笑ってみせると、彼は指を下ろした。

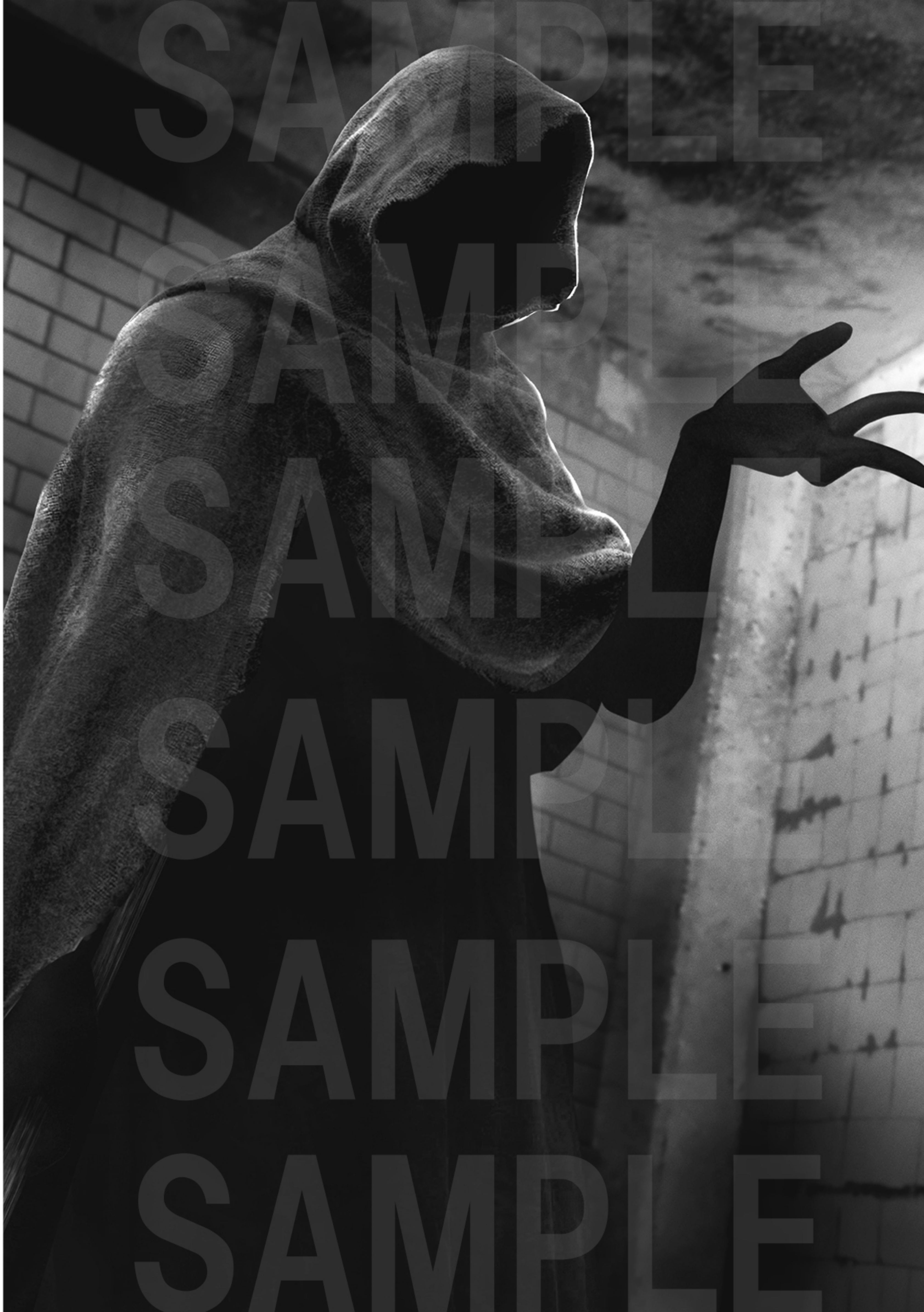
「**へへへ**」

(合っていた……?)

反応を見るに大きく間違ってはいなかったはず。フードのせいで表情どころか顔のパーツひとつさえ見えず、携えた斧の存在感が気になるけれど、やはり彼にこちらを攻撃する意図はないようだ。敵意がないことが感じ取れたので、彼から意識を外し改めて部屋を見渡した。彼がいること以外、この部屋も今まで見てきた部屋と大差はない。

壁に沿って、いくつかのバケツが並んでいる。古びたトタン製のバケツ。ハンドルについた木製の持ち手はひび割れ、隙間から黒ずんだ斑点がじわじわと浸食していた。何か液体が入っているものもあり、くすんだ水面には油の膜が張っている。

ガタン!



ふと、風もないのにバケツが倒れ、足元まで転がってきた。

「！ びっくりした……」

突然のことだったので大袈裟に肩が跳ねた。私が退かすよりも先に彼がバケツを拾い上げ、空っぽのそれを指さしながら「**ふふふ**」と言った。

「……？ あ、これの名前か……じゃあこっちは何ですか？」

バケツの近くにあった空の段ボール箱を指さす。

「**ふふふ**」

「一緒なんだ……」

用途が同じなら区別せずに『**ふふふ**^{入れ物}』と呼ぶのかもしれない。

私が疑問に思うことを聞くと、彼は律儀に全部答えてくれたのでいくつかの単語を理解できた。淡々とした低音。迷いなく凜とした佇まい。あまりに感情が見当たらないので機械のようにも感じられ、様子を窺っている^{うかが}と彼が屈んだ拍子にフードがはらりと捲^まかれた。

「あ……頭！ 頭がない！」

彼の頭部は、存在しなかった。断面は異様なほど滑らかで、斬首されたかのように首から上が欠落しており、向こう側の壁が見える。彼は意に介す様子もなく、淡々とフードを被り直した。

「**ふふふ**」

「それでいいんだ……」

というか頭部がないのにフードを被れるのか。

彼が人間であるという可能性は消えた。何者なのだろう。身体^{からだ}はどうなっているのだろう。疑問

は尽きず、不^{ぶしつけ}躱な視線で観察しても彼は一切頓着せず私自身に興味を示さない。初対面の相手に言語を教えたり、こちらの理解度を気にかけて発声の速度を落としてくれる気遣いは持ちあわせているようだが……。

（敵ではなさそうだけれど、よくわからない）

その時、彼が私のほうに向き直ってゆつくりと言葉を発した。

「**eset awa neta pita neta**」

トーンは落ち着いているけれど、何かを注意するニュアンスを感じる。とりあえず^{うなず}頷くと、彼も軽く首肯した。彼がドアのほうへと動いたので、私も入ってきた位置から反対側にあるドアを開ける。その先にはまたしても似たような灰色の廊下が続いていた。

いつまでもここにいるわけにはいかない。出口を探さなければ。

（……別れの挨拶はどう表現するのだろう。まあいいか）

軽く手を振ってみせると、意図が伝わったようだ。

会釈程度に首を動かし、彼もまた私とは違うドアの向こうへと消えていった。

歩きながら先ほど見た光景を思い返す。フードの下、空っぽの頭部。ふと今朝教室で聞いた^{うわさ}噂話が^{ばなし}脳をよぎった。絶えず噂になるほど頻繁に目撃されるオカルト、人間ではない生き物。それらはまとめて「怪異」と呼ばれる。……彼はいわゆる「怪異」だったのかもしれない。私が目覚めて最初に目撃した長い髪の男も、きつと。

そしてここは――

視界に広がるのはセメントで塗り固められた床と、コンクリートが剥落^{はくらく}して所々鉄筋の露出した壁、そして雑多に散乱するガラクタばかり。陽^ひの光も届かず、空気が淀んでいて薄暗い。考えられるのは、ここは彼ら……怪異たちの住^{すみ}処であるということだ。

「どうして私がこんな場所に……？」

自分の格好を見下ろす。制服のシャツやスカートのあちこちに血が付着しているのが気になるが、外傷は見当たらない。持ち物は何ひとつなく、スマートフォンすら所持していない。仮にあったとして電波が届くかどうか定かではないけれど。

考えながら次のドアを開ける。――が、何かに引っかかってしまった。何度ノブを回しても同じ感覚に阻まれる。ドアを肩で強く押し、僅かな開口を作って強引に押し入ろうとした時、か細い声が聞こえてきた。

「**あなた**」

「きやあ！」

ドアの隙間の暗がりを目玉がふたつ。低い位置から知らない男がこちらを覗いていた。うねうねと強い癖のある黒髪が、濡^ぬれたように顔に張りついている。小さな瞳孔が特徴的な四白眼^{しはくがん}。じつと私を見上げたあと、彼は口角を不穏に吊り上げる。

「**eset**」

「それは、挨拶……？」

こんにちは、とか？

彼は闇の中から手を出し、こちらへ手のひらを向けた。

「**私 欲しい 欲しい 欲しい**」

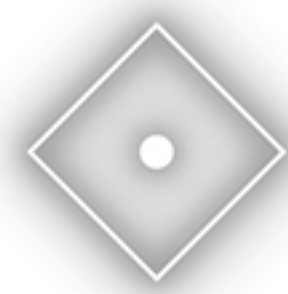
差し出された手がちよいちよいと揺れる。まるで、**くれと要求している仕草だった。何か**
『欲しい』と言っている？

「**私 欲しい、あなた 欲しい、欲しい？**」

欲しいと言われても何が欲しいのかわからないし、そもそも身ひとつでここに来ているのだから与えられるものなど持っているはずがない。一瞬だけ考えて、**開けたドアを元通りにそっと閉めた。**こういう時は見なかったことにするに限る。

「……不審者つてやつかな」

人間が通れないような細い路地から姿を現す怪異の噂を、誰かがしていた気がする。あれは誰だったか。思い出そうと意識を集中させると、途端に記憶の輪郭がおぼろげになる。意識しなければ脳裏に教室のざわめきが蘇るのに、ひとつひとつの音を、声を、拾おうとした瞬間に霧散してしまうのだった。



迷いついた廊下に、隙間なく降ろされたシャッターがあつた。幅は車一台ほど、高さは天井近くまである。おそらく白かった塗装は経年によつて錆に蝕まれ、継ぎ目にも赤茶けた錆がびっしりこびりついている。鉄から変質した硬いウロコに見えた。

来た道も行く先も闇に吞まれている。明かりがあるのはこのシャッター付近だけ。

(……入ってみるしかないのかも)

深呼吸し唾液を飲み下した。シャッターに手をかけて一思いに引き上げる。

ガララララ！

想定外に大きな音が奥まで響き渡り、心臓が縮みあがつた。よくないものまで呼び寄せそうで、ハラハラしながら耳を澄ます。音は長く尾を引いて消えた。しばらく待っても、何かが近づいてくる気配はない。止めていた息を吐き出しながら徐に中へ入った。

車庫に似ている。

十畳足らずの空間を、天井から吊り下がった傘つき電球がぼんやりと照らしている。あちこちに転がるドライバーやスパナなどの工具。たくさんポリタンク。鉄と薬品が混ざった匂いが鼻を刺す。恐らくガソリンだろう。吸い込むたび、頭の奥が少しずつ痺れていく気がしてあまり長居したくはない。部屋の出口を探して視線を動かした時、工具の合間で何かが動いた。

「……え？」

手だ。

手首からすっぱり切り落とされた人間の片手が、いる。落ちているのではなく、指を足代わりに自立して、己の存在をアピールするように跳ねてみせた。

「生きている……？」

戸惑う私を置き去りに、彼は「あれ見て！」と言いたげに何か指さす動きをする。視線で追うと人間の生首が床に転がっていた。こちらも生きているようだ。鮮やかなオレンジ色の髪をゆるく三つ編みに結わえ、幼さの残った顔立ちをしている。彼は私を見て驚いた顔をしたあと、すぐに人懐

つこくにつこり笑った。

「こんにちは
konnichiwa」

敵意のない朗らかな挨拶をされて面食らう。

軽く会釈を返すと、彼は一気に捲し立ててきた。

「**soo zozo i zozo**
sozo zozo
sozo zozo
sozo zozo」

(どうしよう、さっぱりわからない)

下がった眉とへの字に曲がった口元から、彼が何かに困っているのは伝わってきた。

「えっと……困っているから私に何かしてほしいうてことだね」

私が発した言葉が、自分が使っている言語ではないことに気づいたのか、生首くんはきよんとした表情で大きく瞬きを^{まばた}する。しかしすぐにまた元通りの笑顔になった。

「**sozo zozo**
sozo zozo
sozo zozo」

「持つてほしいうてこと……?」

正直、素手で触るのはかなり抵抗がある。でも彼らに敵意はないようだし、こうも一生懸命頼まれてしまうと断るのも難しい。さっきのように見なかったことにして退散はできない。躊躇^{ためら}いつつも生首くんを両手で持ち上げてみた。

「……結構重い……」

ボウリングの球に似た存在感で米袋ほどの重さがある。手首くんがトコトコと部屋の隅へ動いて、人差し指で何かを示す。床には避難用ハッチのような開口部があった。

「**sozo zozo i zozo i zozo zozo**」

(絶対『入れ』って言っているよね)

梯子^{はしご}が掛かっているから、これを伝っていけば落下はせずに済みそうだ。

「……行くしかないか」

生首くんを抱えたまま、梯子へと踏み出す。手首くんはどうするのかと思いきや、ちゃっかり私の頭に乗ってきた。このふたり——パーツを『ふたり』と数えるのか微妙だが——感情豊かで友好的^{ずうずう}でなかなか図々しい。頭部を抱えながらの降りる動作は結構大変なのだけれど。

呆れ^{あき}つつも最下部まで降りていくと、さらに深い場所へ続く階段があった。

「**sozo zozo i**」

手すりのない、辛うじてひとりが通行できる幅の階段が、夜の底へと吸い込まれるように続いている。下方から、冷たく湿った空気がゆるやかに這い上がってくる。場所の不気味さとは相反して、生首くんは明るく先を促してきた。一段踏み出すごとに足音が微^{かす}かに反響して、鼓膜を揺らす。途中、壁沿いの電灯が接触不良を起こしてジジッと瞬いた。

「これ、本当に入っている場所なんだよね……?」

「**sozo zozo**
sozo zozo」

(……まあ、まずかったら即座に退散すればいいか)

階下に着くと、狭い通路にぽつりとひとつドアがある。ひと呼吸置いてから中へ入ると、妙に現

実世界らしい空間が広がっていた。

広い部屋の中央にはローテーブルが置かれ、それを囲むように大きなソファアが配置されている。天井には蛍光灯。壁には棚。応接室、あるいは待合室、簡易的な居間にも似た佇まいだ。すべてが明確な意図のもとに整えられており、今まで通ってきた退廃的な廊下や部屋と比べると、異様なほど生活の気配が濃かった。

(それが逆にちよつと怖いんだけど……)

「**こんにちは**」

急に声を掛けられて瞠目する。

いつの間にか近くにいる長身の男が、私を見下ろして柔らかく笑った。

両目を覆うように包帯が巻かれている。顔の半分近くが布で隠れているが、すっきりした顎のラインや整った鼻梁、柔和な口元から、端正な顔立ちであることは十分に伝わってきた。印象的な銀色の髪は胸元を越えるほど長い。

白衣を羽織っているため、一見すると理知的な印象を受ける。だがその白衣はひどく血で汚れ、裾が擦り切れ、袴のような黒い衣類も末端がほつれていた。しかも白衣は上裸に羽織っているだけで、鎖骨や引き締まった腹筋が無造作に晒されている。

「**私 元気い**」

生首くんが元気に、銀色の髪をした男に話しかける。

「**あなた 元気い 元気い**」

「**あなた 元気い 元気い 私 私 元気い**」

「**元気い**」

眉根を寄せ感情豊かに話す生首くんに対し、銀髪の男は鷹揚に頷く。そんな二人を置いて、手首くんはソファアへと跳び乗り、くつろぎはじめた。もしかしたら、ここは彼らの生活拠点なのかもしれない。

不意に生首くんが声を弾ませた。

「**元気い 元気い 私**」

「**元気い 元気い 元気い 元気い**」

(私のことを話している……?)

二対の目がこちらを向いたのでドキリとしたが、生首くんはもちろん、彼の話を聞く男性の表情も穏やかだったので好意的に話されているように感じた。二人を交互に見ていると、彼が手を差し出してきて私から生首くんを受け取った。

「**元気い 元気い 元気い 元気い**」

「えつと……」

微笑を浮かべた表情から察するに……お礼だろうか。

そんな気がするけれど確信が持てない。曖昧に笑っていると、

「**元気い 元気い 元気い 私**」

「**元気い 元気い 元気い 私**」

フードを被った彼も、言葉を教えてくれた時に同じ単語を使っていた。『**言葉**』を『**教える**』……つまり言葉がわからないなら教えようか、ということだろう。私が頷くと、彼は椅

子に腰かけ、私にも座るよう促す。

(彼は友好的みたいだけど……)

突然未知の世界に放り込まれ、休みなく歩き続けてきたのだ。さすがに疲労を自覚せざるを得ない。一度くらいは身を委ねてもいいだろうと判断し、彼が腰かけているソファアの向かい、テーブルを挟んで置かれた椅子に座った。ふう、と無意識で吐き出した溜息は重い。

視線を上げると、彼と目が合った。包帯の奥から、静かに観察されている気配を感じる。名前がわからないから、印象で呼び名をつけさせてもらおう。銀色の髪の男性なので、とりあえず銀髪の男さんとも呼べばいいだろうか。

「**私 教える 言葉**」

そう言つて、彼はコインを取り出す。彼の説明は極めて丁寧で、教え方も上手だった。物の『ある』『ない』に始まり、数字、前後、上下左右など役立ちそうな語彙を増やすことができた。生首くんも協力してくれて、目や口などパーツ、嬉しいや悲しいなどの感情表現の単語を教えてくれた。彼は表情筋が豊かで喜怒哀楽がはつきりしているのでわかりやすい。

「**たずねる 確認 している**」

(訊ねるような言い方……確認をしている?)

文脈を考えるに『**可能**』とか『**できる**』という意味かな。

新しい言語を一から覚えるのはやはり難しい。文法は複雑ではなさそうだけど、それでも正しく理解するには時間が掛かるだろう。私が考え込んでいたからか、銀髪の男さんが緩く首を傾げる。

「**うんうん**」

優し気に気遣うような雰囲気から「どうしたの?」と聞いている気がした。

「**うんうん**」

「なんだろう……」

「**私 “可能”**」

生首くんが口を挟んで、こうだよと実演してくれる。眉間に皺を寄せて苦しそうにしているから、具合が悪いとか調子が悪いという単語だと察することができた。不調と、もうひとつはなんだろう。そう思っていたら、銀髪の男さんが手近なワゴンからメスを取って自分の手のひらに当てた。

「え」

薄皮一枚、と言わず無造作にぎっくりと切る。当然、血が滴り落ちる。

「**負傷**」

「……わかったから、もう切らないで大丈夫」

この人は何の躊躇いもなく自分の体を切るのか。

ポケットに辛うじてハンカチが入っていたのでそれを彼に差し出す。彼はしばし不思議そうに黙り、ようやく意図を理解したのか「**ありがとう**」と口の端を持ち上げながら受け取った。

会話を切り上げ、立ち上がる。並んだ棚の奥にドアがあることに気づいた。

防火扉に似た重苦しい鉄製のドアだ。四隅から侵食してきた錆が、模様のように張り付いている。視線に気づいた銀髪の男さんが「**ドア**」と教えてくれる。

「**ドア**」

ドアノブに手を掛けても制止されることはなかった。

「……………うわ」

中は三畳ほどの狭い空間で、噎せ返るほどの鉄臭さ……血の臭いが立ち込めていた。真ん中に設えられた大きな台には鎖や手錠、天井から吊り下がった鋭い鉤爪、壁に掛けられた刃物や鈍器、拷問でしか見たことがない拘束具つきの椅子が置かれている。それらすべてに夥しい血痕がついている。一目で、ここが生き物を実験・解体する部屋だとわかった。思わず後ずさると、床に残った血で靴が滑った。よろけた背中が柔らかいものに当たり、肩を支えられる。首だけで振り向くといった間にか背後に銀髪の男さんがいた。

「**実験する部屋**」

そう彼が言い、軽く首を傾けると絹糸のような髪がさらりと揺れた。

目元は包帯で見えないが、造りものめいた綺麗な微笑みに、乾いた笑いしか出てこなかった。

出会った時から感じていたアンバランスな不気味さに合点がいく。穏やかで友好的、表情の作り方や所作は今まで出会った誰より人間らしいのに、得体の知れない怖さを纏っている。

「……そろそろ行きますね。先を急ぐので」

実験部屋を出ると、生首くんたちはソファで眠っていた。一瞥してからドアを開け、元来た階段を上る。

ふと視線を感じて振り向くと、階下に銀髪の男さんの姿があった。

「**さようなら**」

私にそれだけを言い、彼は微笑みを浮かべたまま部屋へと戻っていった。

ひとりになり、再び階段を上がる。反響する足音に先ほどの光景がリフレインする。

噎せ返る血の臭いと、凄惨に飛び散る赤。

私は先ほどの部屋によく似た光景を、どこかで見たことがある気がしていた。



「景色がまったく変わらない……」

一向に“端”を見つけれないまま探索を重ねるうち、ここが単なる廃墟ではないことが理解できた。通路と扉が際限なく連なり、大小の部屋が無秩序に挿入される。さらに厄介なのは、その構造だ。ただの一本道ではなく曲がり、分かれ、上下にずれる——そのすべてが、こちらの方向感覚を摩耗させる。

そして時折、音がする。

悲鳴に似たもの、液体を啜る湿った音、あるいは咀嚼を思わせる不快な蚕食音。それらは遠く離れた場所から聞こえてくることもあれば、唐突に直近の曲がり角の向こうから聞こえることもあった。

ここまで幸運にもコミュニケーション可能な怪異との遭遇が続いていたけれど、話してどうになる相手ばかりではないのかもしれない。

「せめて何か武器が欲しいよね……」

そんなことを呟きながら、ふと壁を見やると鉄格子の嵌まった細い通気口の隙間から男が覗いていた。

「びっくりした……また貴方ですか……」

以前にもドアの隙間から覗いていた、あの癖毛の男だ。彼もまた名前がわからないから、とりあえず特徴を拾って隙間の男さんと呼ぶことにする。

「**アッパッパッ** **アッパッ** **アッパッ**……」

男は手で鉄格子を掴み、気落ちした声で言う。

（出られない、ということ？）

彼は何かをこちらに見せようとしている様子だったが、格子が邪魔してうまくいかないらしい。カツカツと硬いものが当たる音が数度聞こえ、やがて残念そうに消えていった。

彼が消えたのと入れ違いに、廊下の先から何かを引きずる音が聞こえた。

ずり……ずり……。

（誰か来る……!？）

砂地を這うような重い音に、踵を床から引きはがして走る。迷っている暇はない。手近な部屋へと、何も考えずに飛び込んで物陰に身を隠した。

ずり……ずり……。

音は確実に近づいてくる。

自分の心臓が跳ねる音が耳元で聞こえる。まるで頭の中で拍動しているかのようだ。緊張に汗ばむ手を握りしめながら、引きずる音が聞こえなくなるのを待っていると、ぴたりと音が止んだ。痛いほどの静けさに残されたのは私の鼓動と呼吸音だけ。

（行った……?）

慎重に立ち上がり、物陰から顔を出して覗く。向こう側には誰もいなかった。

胸を撫でおろし、座り直した瞬間――

「**どうしたの**」

「うわっ!」

目の前に男がいた。もし今手に何か持っていたらそのまま正当防衛で殴っていたかもしれない。飛び出しそうになった心臓のあたりを押さえていると、彼はますます心配そうに言う。

「**負傷** **アッパッ** **アッパッ**」

「あ……」

「**悲しい** **アッパッ** **アッパッ**」

言語がわかると少し冷静になれる。目の前にいる彼を改めて見る余裕も生まれた。

「あれ? もしかして……」

私がこの世界に来て初めて会った怪異?

青白い肌に、長い黒髪。ぺたりと両腕を前についた、不自然で特徴的な移動姿勢。潰れてしまった両目の周りには血が滲んでいるが、垂れた髪の陰になって目元全体はよく見えない。それでも唯一まともに見える唇が如実に感情を表していて、今は心配そうに口角が下がっている。

そういえばあの時も彼は同じことを言っていた。

—— どうしたの？ 負傷？

驚いて反射的に逃げてしまったけれど、彼の様子はどう見ても攻撃的ではなかった。むしろ、こちらを案じているようにさえ見えた。今もそうだ。私が黙っていると、彼はゆっくりと手を伸ばし、私の頭に触れた。身構える間もなく指先が丁寧に髪をなぞり、すりすりとお撫でる。

「**うんうん うんうん、 きれい？ きれい**」

触れる指先は優しく、声も宥めるように穏やかだ。

（もしかして危険人物ではない……？）

私の警戒と不安が僅かに解かれたことに気づいたのか、彼は薄い唇の両端を持ち上げて甲高い声でケタケタ笑った。話す声は普通か低いくらいなのに突然独特の笑い方をするから驚く。

「あの……離れて……ただけます……か……？」

「**あなた うんうん？**」

当然通じないので、彼が離れる気配はない。

「**うんうん あなた**

私 うんうん あなた

あなた ひとり うんうん」

こちらにじつと視線を注いだまま、何かを必死に訴えてくる。

これまで会った怪異たちも、こちらを観察してくることがあった。だが目の前の彼の視線はそれとはまた違って感じられる。床に座って私を見上げてくる姿勢なことも相まって、よく懐いた大型

犬に行動を見守られているような気分だった。

「えっと……私は大丈夫」

「**うんうん うんうん！**」

笑ってみせたことでようやく納得できたのか、彼が後ろに下がって道を開ける。

部屋を出ようとした時、入口のすぐ近くの壁に立てかけてある黒い棒を見つけた。腕の長さと同じくらい金属の先端は、釘抜き状に垂直に曲がっている。何の変哲もない、どこにでもあるボールだった。深く考えずに手に取る。手のひらに伝わってくる重みには安心感があった。

（ちょうど武器が欲しいと思っていたところだし、持っていこう）

廊下に出て数歩進むと後ろから引き摺る音がついてくる。

振り向けばすぐ見える位置に、先ほどの這った姿の男……這いばい男さんがいた。

「え、なんで？」

問いかけに彼は首を傾げ、私の言葉を聞き漏らすまいと一層近くへと寄ってくる。

「**……？ あなた うんうん うんうん？**」

「つ……ついて来ないでいいから……」

こちらは足を速めるが、後ろから聞こえてくる衣擦れ音は止まない。振り向くと、いる。さらに速度を速め距離を置いてから振り向くと、やっぱり、いる。振り切るつもりで競歩並みの速さで歩いているのに、こちらが急げば同じように急いでついてくる。たまらず立ち止まり、恐る恐る背後の様子を窺う。

「ヒッ！」

(なんで真後ろまで来ているの!?)

私は息切れしているというのに、彼は平然としている。

「な……何かご用で……?」

「**haya hayan, jann**」

「ひとりだと危ないという意味?」

「**eset ayay yusa**」

「**eset ayay eset**」

「……まあいつか」

彼の目的がどうあれ、現時点で敵意がないのならしばらく一緒に行動しても問題ないはず。わかった、という意味で軽く頷くと、彼は嬉しそうに表情を緩めた。歩き出すと、私の影を踏むように摩擦音が私の後ろを従順についてくる。

「それにしても広すぎる……地図があればいいのに」

この景観に突然親切に地図が掲出されていてもそれはそれで可笑しいけれど、どれだけ歩いても出口に近づいているのかさえわからないという状況は非常にもどかしかった。

溜息を漏らしながら次の扉のドアノブに手をかけた瞬間、這いばい男さんが突然声を掛けてきた。

「**eset eset eset eset eset**」

決して語気の強い言葉ではなかったが、はつきりと断定的な口調だった。

「すべきじゃない? 何を……うわ!」

「**jann!**」

ドアを開けた先には、床がなかった。床どころか天井も壁も消え失せ、ブラックホールのような漆黒の闇が今にもこちらを飲み込まんと大きく口を広げていた。踏み出そうとしていた右足を咄嗟に引つ込め、思わず後ずさる。

「忠告してくれていたの……?」

聞きながら振り返れば、彼は必死に私の服の裾を掴み、引き戻す。

「**jann! jann!**」

「**eset eset eset eset**」

「き、気を付けます……」

扉を閉めたあとも、這いばい男さんは早く扉から離れるよう促し、私が再び危険に晒されないようにと安全な廊下へと誘導してくれる。

(……成り行きで一緒に行くことになったけど良かったかも)

その後も、彼は危険を察知するとすぐに教えてくれた。

この空間はそもそも道が悪く、トラップめいた部屋も点在しているようだ。そして気を抜くと危険な怪異の住処に足を踏み入れそうになる。こうして先んじて危険を知らせてくれる彼の存在は心強かった。加えて手には武器もある。

だから、気が緩んでいたのかもしれない。

しばらく彷徨ったあたりで、気づけば静寂が一段深くなり、陰鬱な空気が周囲に漂いはじめた。温白色に廊下を照らしていた電灯が、羽虫が引つ掛かったようにジジ、と明滅したかと思えば、

途端に鮮やかな赤色へと変わった。狭い廊下で反射した光が増幅し、気づけば視界は逃げ場もなく赤に塗り潰されていた。

コツ……コツ……。